

平成 30 年 4 月 12 日

南の風 267

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

『強いチームをつくるために』の3つのキーワードの2番目は、「戦略」です。

すなわち、「どうやって勝つのか」という道筋です。これは、当然一つ目のキーワード、「戦力」とも大きく関わってきます。自分たちのチームにはいかなる人材がいるのか、強みはどこで、弱みは何かということ、それらを十分考慮して戦略を練らなければなりません。

例えば、チーム内の学年構成（6、5年生と下級生の割合）、身体能力（身長や走力、跳躍力等）、運動能力（コーディネーション能力）などを見極めて、「どうやればチーム力がアップするのか」また、「どうすれば選手を向上的に変容させる」ことができるのかを熟考することが必要です。

そしてさらに大切なのは、「264号の目標の共有」のところでも書いたように、「今年はこのやり方で行くんだ！」という方向性を、チーム全員が共有することです。ここにブレやズレが出てしまっただけでは、戦略が正しくてもチームとして持てる力を発揮することができなくなります。

戦い方の方向性が「戦略」だとすれば、それを具体的な戦い方に落とし込むのが「戦術」です。そしてこの「戦術」が3つ目のキーワードになります。

戦術とは、端的に言えば、掲げた戦略のもとで、「どこで、だれが、何をするか」ということを具体的に示すことです。

例を挙げます。オフェンスでは、「高さがあるのでポストを中心に攻める」ということであれば、ポストでのボールのもらい方や、ポストでの攻め方（ステップワークやシュートセレクション等）、ボールの捌き方、またパスの入れ方、周りの合わせ方といった具合に戦術を練っていきます。

また別の角度から見ると、バスケットボールには相手があります。必要不可欠なのが、「情報分析」です。自分たちの強みと弱みを認識すると同時に、相手の強い部分は何か、弱い部分はどこか、ということをしかり分析しておくことが必要になります。そのうえで、相手の弱い部分に自分たちの強い部分をぶつけながら、ゲームを支配していきます。

例えば、相手のガードに経験が少なくボールハンドリングに難があるのなら、ディフェンスでプレスを仕掛け、ボール運びに時間を掛けさせたり、ミス誘ったりして主導権を握るようにすることです。

また、相手が小柄なチームで自チームが高さで上回るならば、多少遠くからでもシュートを打ち、リバウンド勝負に持ち込むことも考えられます。

このように「情報分析」は戦術を考えるうえで欠くことができません。

戦略・戦術について書きましたが、コーチの計画通りに事態が推移することは、よほど実力に開きがない限り、まずありえません。力が拮抗すればするほど、戦略・戦術には狂いが生じてきます。

その時、リーダーがいかなる判断をし、どう決断するかがゲームの行方を大きく左右します。

ミニバスの県大会でのことです。力が拮抗しているチーム同士のゲームでした。仮にAチーム、Bチームとします。1Q～2Qは差が付かずにゲームが進みます。3Qに入り、Aチームは自分たちの戦術が思うようにならなくなります。予め準備したオフェンスが機能しません。続きは次号にします。